

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 3 年 6 月 20 日現在

機関番号：34511

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12487

研究課題名（和文）満洲国軍出身日本人による満洲経験と自己をめぐる記憶・認識

研究課題名（英文）Memory and Understanding Concerning Experiences in Manchuria and Themselves of Japanese from Manchukuo Imperial Army

研究代表者

飯倉 江里衣（Ikura, Erii）

神戸女子大学・文学部・助教

研究者番号：40814695

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、満洲国軍出身日本人が戦後、満洲国軍での経験をどのように記憶・認識し、「満洲国」（以下、括弧を省略）の日本人軍人であった自己をどう回想し位置つけてきたかを、民族・階級・ジェンダー／セクシュアリティの視点から分析し、明らかにするものである。

研究成果としては、第一に、「歴史学における記憶研究」というテーマを扱ううえでの方法論を検討し提示した。第二に、その方法論を用いて、1970～1980年代に満洲国軍出身日本人が記憶・認識していた満洲国・満洲国軍像を描き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、本研究は会報や回想録、インタビューという、従来の歴史学において重要視されてこなかった資料を用い、執筆者や証言者が語るその時点において、過去をどのように認識・記憶しているのかを分析するという「記憶研究」の新たな地平を開いた。

第二に、従来の満洲国軍研究に欠如していた民族・階級・ジェンダー／セクシュアリティの視点を通し、満洲国軍日本人の「他者」との重層的かつ輻輳的な関係性と、「他者」との関係性によってつくられる記憶・自己認識を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）： This study tried to analyze and show how Japanese from Manchukuo Imperial Army had memorized and understood their experiences in the military, and recollected and evaluated themselves who were Japanese servicemen of Manchukuo since after the war by the viewpoint of race, class and gender/sexuality.

As the result of the study, firstly, I present the methodology of “memory studies of history.” Secondly, I show how Japanese from Manchukuo Imperial Army memorized and understood Manchukuo and Manchukuo Imperial Army from the 1970s to 1980s.

研究分野：朝鮮近現代史

キーワード：満洲国軍出身日本人 記憶・認識 満洲経験

## 1. 研究開始当初の背景

近年、満洲国軍研究が盛んである(及川琢英 2014・2016a・2016b、拙稿 2015・2016、松野誠也 2016 など)。以前は、吉田裕(1986)と山田朗(1986)が先駆的な研究として存在したが、国内外での新たな一次史料の発見と満洲国軍への関心の高まりによって、満洲国軍は注目を浴びている。しかし、研究開始当初の研究状況には次の3つの問題点が存在した。

第一に、満洲国軍研究の関心は主に満洲国軍の制度や組織に集中しており、満洲国軍で服務した当事者たちの経験やその記憶を歴史化する作業は行われていない。とりわけ、満洲国軍出身の日本人たちは戦後日本に引揚げた直後より団体を結成し、遺家族補償運動や建碑・建墓、慰霊祭などを行うとともに、会報・回想録集を刊行してきた。彼らは会報や回想録集のなかで満洲国軍での経験を赤裸々に語っているが、これらの資料は満洲国軍に関するいわゆる一次史料とは異なるため、歴史的価値のある資料として十分に活用されてこなかった。

第二に、これまで日本の満洲移民研究では、当事者に対するインタビューの手法が積極的に取り入れられてきたが、満洲国軍研究に関しても同様にインタビューを活用することができる。しかし、現在は高齢化により、満洲国軍出身日本人を含めた満洲体験者へのインタビュー調査が可能な最後の時期である。

第三に、近年の満洲国関連研究では、猪股祐介(2015)、山本めゆ(2015)など、ジェンダーやセクシュアリティの視点を取り入れた研究が出ているが、満洲国軍研究においてはジェンダーやセクシュアリティの視点が欠如してきた。

### (参考文献)

飯倉江里衣(2015)「朝鮮人の満洲国軍・中央陸軍訓練処への入校」『日本植民地研究』27、pp.20-37

(2016)「満洲国陸軍軍官学校と朝鮮人：口述資料を通してみる教育経験」『朝鮮史研究会論文集』54、pp.143-171

猪股祐介(2015)「ホモソーシャルな戦争の記憶を越えて：「満洲移民女性」に対する戦時性暴力を事例として」『軍事史学』51(2)、pp.94-115

及川琢英(2014)「満洲国軍と国兵法」『歴史学研究』921、pp.23-40

(2016a)「満洲国軍」創設と「満系」軍官および日系軍事顧問の出自・背景」『史学雑誌』125(9)、pp.1561-1587

(2016b)「満洲国軍」の発展と軍事顧問・日系軍官の「満系」統制」『北大史学』56、pp.1-26

松野誠也(2016)「関東軍と満洲国軍」『歴史学研究』949、pp.34-48

山田朗(1986)「軍事支配(2)日中戦争・太平洋戦争期」、浅田喬二・小林英夫編『日本帝国主義の満洲支配』時潮社、pp.163-253

山本めゆ(2015)「戦時性暴力の再 - 政治化に向けて：「引揚女性」の性暴力被害を手がかりに」『女性学』22、pp.44-62

吉田裕(1986)「軍事支配(1)満洲事变期」、浅田喬二・小林英夫編、前掲書、pp.93-159

## 2. 研究の目的

満洲国軍出身日本人が戦後、自らの満洲国軍での経験をどのように記憶・認識し、満洲国軍の日本人軍人であった自らの立場をどう回想して位置づけてきたかを民族・階級・ジェンダー/セクシュアリティの視点から分析し、明らかにする。

## 3. 研究の方法

下記の課題1～3について、それぞれの方法に基づき研究を遂行した。

### 【課題1】満洲国軍出身日本人にとっての「五族協和」と日本人(民族の視点)

満洲国軍は「五族協和」の理念のもと、日本人指揮官が他民族(漢族、モンゴル人、朝鮮人など)を指揮するという特殊な環境にあった。また、満洲国軍は満洲という多民族が居住する空間で、民間の他民族との接触も多くあった。本課題に関連し過去に飯倉は、満洲国軍出身日本人団体の蘭星会が1970年代前半に慰霊の方法をめぐる関東と関西で分裂したことを明らかにした(佐藤量ほか 2015)。この分裂の際に双方が合意に至らなかった最も大きな問題は、関西側が祭祀範囲に他民族(漢民族、朝鮮民族、満洲民族、モンゴル民族)を含めたことであった。結果的に関西側は見切り発車を決め、満洲国軍五族之墓奉賛会という団体として1976年に「五族之墓」を関西(和歌山県の高野山奥之院)に建てた。

本課題では、満洲国軍出身日本人による1)軍内の他民族についての記憶・認識、2)民間の他民族についての記憶・認識、の分析とあわせて、3)「五族之墓」の建墓にあたって関東側はなぜ他民族を含めることに反対し、関西側はいかなる論理で他民族を含めることにこだわったのか、

また、関東・関西側はそれぞれ他民族との関係において日本人をどのように位置づけていたのか、を明らかにした。本課題によって、彼らが日本の満洲支配について、日本人としての責任や立場をどのように認識していたかが浮き彫りになった。

#### 【課題2】満洲国軍出身日本人の関東軍認識とアイデンティティ（階級の視点）

先行研究では、満洲国軍は関東軍より、常に差別的眼差しを向けられてきたことが明らかにされている。そのような眼差しは、満洲国軍に服務する日本人に対しても同様に向けられた。さらに、戦後の軍人恩給においても関東軍と満洲国軍の日本人では待遇が異なった。本課題に関し過去に飯倉は、戦後、満洲国軍出身日本人は「外国軍人」であるとして軍人恩給を受けられないことに対し、1972年に蘭星会が処遇問題研究委員会を発足させ、関東軍との同等な処遇を求めて運動を展開してきたことを指摘した（佐藤量ほか2015）。

本課題では、満洲国軍出身日本人による1)関東軍についての記憶・認識、2)日本と満洲国双方への帰属意識を分析するとともに、3)戦後の軍人恩給獲得運動のなかで自分たちの満洲国軍軍人としてのアイデンティティをどのように位置づけたのか、その際に満洲はどのように想起されているのかを解明した。本課題によって、彼らが戦後の日本社会で、元満洲国軍軍人としての「誇り」やアイデンティティをいかに形成したかが明らかになった。

#### 【課題3】満洲国軍出身日本人の「男性性」とセクシュアリティ（ジェンダー／セクシュアリティの視点）

満洲国軍の日本人は、他民族男性に対しては指導的役割、日本人女性に対しては守護者的役割を担わされることで自らの「男性性」を確立していったといえる。一方彼らは、村落や料理屋、軍「慰安所」などで他民族女性と接する機会も多くあり、戦後もそのような場で出会った女性たちのことを度々回想している。しかし実際には、満洲の村落や料理屋、軍「慰安所」などで出会った他民族女性とは、彼らにとって「守るべき存在」というよりもむしろ、性的支配の対象となっていたといえよう。

本課題では、1)満洲国軍出身日本人が他民族女性をどのように記憶・認識しているのか、2)それは日本人女性に対する彼らの記憶・認識とどのように異なるのか、また、3)彼らは自分たちの「男性性」を日本人女性、他民族男性、他民族女性に対置させいかに構築しているのか、という考察を行った。本課題によって、「日本人（男性）らしく」、「軍人（男）らしく」あれという強迫観念が、いかに他民族女性への性的支配と結びつき、彼らのなかで正当化されていたのかを示すことができたと考えられる。

#### （参考文献）

佐藤量・新谷千布美・菅野智博・飯倉江里衣(2015)「帰国邦人団体の会報からみる満洲の記憶」、『信濃』67(11)、pp.45-68

## 4. 研究成果

主に三つの成果があった。

第一に、「歴史学における記憶研究」というテーマを扱ううえでの方法論を検討する基礎研究ができたことである。この成果は、日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』（岩波書店、2018年）に飯倉江里衣「第22章 記憶」として掲載された。『日本植民地研究の論点』は、日本植民地研究を志す学生の入門書、あるいは他分野の研究者が日本植民地研究の動向を参照する、授業等の準備の際に参照するテキストとして刊行された。「第22章 記憶」では、日本植民地の記憶をめぐる研究として近年最も盛り上がりを見せている、満洲を対象とし社会学のライフストーリー論を応用した記憶研究の動向、研究事例、主な論点を紹介した。また、今後歴史学として日本植民地をめぐる記憶の研究にどのように取り組めるのかということを論じた。

第二に、その方法論の実践として、課題1「満洲国軍出身日本人にとっての「五族協和」と日本人」、課題2「満洲国軍出身日本人の関東軍認識とアイデンティティ」に取り組み、具体的な成果を出すことができた。満洲国軍出身日本人団体「蘭星会」が戦後に発行した会報を収集し、その会報を分析することで、飯倉江里衣「満洲国軍出身日本人の恩給請願運動と満洲国・満洲国軍像」（佐藤量・湯川真樹江・菅野智博編『戦後日本の満洲記憶』東方書店、2020年）を執筆することができた。満洲国軍出身日本人団体「蘭星会」が日本で1970～1980年代に展開した軍人恩給請願運動（以下、恩給請願運動）に注目し、運動過程で表れた彼らの満洲の記憶と、彼らにとっての恩給請願運動の意味、また、彼らは運動過程で何と闘っていたのかを考察した。彼らにとって恩給請願運動とは、満洲国軍の軍人であったアイデンティティや誇りを強く意識するようになる一つの大きな契機であり、満洲国軍の軍人であったことの「荣誉」や「名誉」、誇りとは何であったのかという問いを自ら突きつけられる経験であった。

第三に、課題3「満洲国軍出身日本人の『男性性』とセクシュアリティ」に関して、多くの文献資料の収集を行うことができた。また、収集した資料を分析し、近々研究成果として発表ができる程度の内容として分析・整理することができた（その成果は2020年度までには未発表）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>飯倉江里衣                          | 4. 巻<br>なし          |
| 2. 論文標題<br>満洲国軍出身日本人の恩給請願運動と満洲国・満洲国軍像    | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編『戦後日本の満洲記憶』東方書店 | 6. 最初と最後の頁<br>75-99 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし            | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>飯倉江里衣  |
| 2. 発表標題<br>満洲国軍出身日本人の戦後と満洲の記憶 蘭星会の軍人恩給請願運動に注目して                         |
| 3. 学会等名<br>翰林大学校日本学研究所 国際シンポジウム「ポスト帝国における文化権力と東アジア 人の移動と記憶」（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2020年   |

〔図書〕 計1件

|                                     |                 |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>日本植民地研究会編（飯倉江里衣 第22章「記憶」） | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>岩波書店                      | 5. 総ページ数<br>288 |
| 3. 書名<br>日本植民地研究の論点                 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|